

中学校運動部活動における 生徒指導の意義に関する検討

——大学生を対象とした想起法による
質問紙調査研究結果を手がかりに——

川 口 厚

1. 問題と目的

「中学校学習指導要領」(2017)では、部活動において学校や地域の実態に応じた運営上の工夫を行い、持続可能な運営体制を整備する必要性が述べられている。また、第三次安倍内閣で公表された教育再生実行会議第十次提言では、これからの部活動の在り方として、地域のスポーツクラブと学校との連携や地域単位で活動できる環境づくりについて検討するなど、「学校による部活動」から「地域による部活動」への転換の必要性を提言している¹⁾。

他方、2017年に学校教育法施行規則78条が改正され、部活動指導員の配置が制度化された²⁾。これにより、学校は、部活動指導員に実技指導や学校外での活動の引率、生徒指導に係る対応等を任せることや、部活動指導員を単独で部活動顧問に任命することが可能となった。次に、スポーツ庁は、2018年に「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を策

キーワード：中学校運動部活動，生徒指導，質問紙調査，大学生

定し、適切な運動部活動運営のための体制整備や休養日等の設定、生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備等の必要性を示した³⁾。

上述のように、近年の運動部活動に係る改革は「チームとしての学校」⁴⁾の実現と教師の働き方改革の推進を目指した学校体制の整備を中心に進められてきたと言える。

しかしながら、部活動の改革の陰に隠れて、部活動の教育的意義を検討する機会がなおざりにされることは、学校教育としての部活動の形骸化を招く恐れがある。これからの持続可能な中学校運動部活動の在り方を追求していくためには、中学校運動部活動の教育的意義を改めて検討することが必要である⁵⁾。

ところで、「意義」とは、辞書によれば、「物事が他との連関において持つ価値・重要性」(広辞苑第7版)、「そのものでなければ果たす(担う)ことの出来ないという意味での、存在理由」(新明解国語辞典第7版)、「行為・表現・物事の、それが行われ、また存在するにふさわしい積極的な(すぐれた)価値」(岩波国語辞典第7版)と定義されている。本稿で述べる中学校運動部活動の教育的意義は、上に示した辞書の定義に基づき、学校教育における中学校運動部活動の価値や重要性、存在理由を含意している。

それでは、中学校運動部活動の教育的意義とはどのようなものなのか。心理学分野では、次のような実証的研究が蓄積されている。桂・中込(1990)は、中学生の部活動へのコミットメントの要因が適応感に与える影響は、大学生と高校生に比べて高いことを明らかにしている⁶⁾。石田・亀山(2005)は、部活動への意欲が学習意欲に影響及ぼす重要な要因であることを示唆している⁷⁾。角谷(2005)、岡田(2009)は、中学校部活動への積極的な参加が学校生活への満足感を高めることを示している⁸⁾⁹⁾。佐川・羽澤(2009)は、中学校部活動における満足感や部活動有用感の向上につ

中学校運動部活動における生徒指導の意義に関する検討

いて検討している¹⁰⁾。上述した心理学分野における先行研究では、中学校部活動が生徒の適応感や学習意欲、満足感に与える影響について論じられている。

そして、体育学分野と教育学分野では、中学校運動部活動を通して形成される資質・能力についての検討が進められてきた。体育学分野では、日野（2010）が、中学校の運動部生徒のライフスキル獲得状況と、指導者の指導や積極的関与の関係について¹¹⁾、青木ら（2011）は、大学生の回顧調査から中学校の運動部活動体験を通じたライフスキル獲得への影響についての検討を行っている¹²⁾。また、教育学分野では、東野（2003）が、部活動への参加が中学生の対人関係の構築に与える影響について検討している¹³⁾。中川・新井（2006）は、中学校運動部活動を通じたコミュニケーション能力や社会規範性の育成について¹⁴⁾、長谷川（2011）は、中学・高校部活動への参加が大学生活におけるスキル獲得に対する志向性に及ぼす影響について¹⁵⁾、桑野ほか（2014）、川口（2015）は、中学校運動部活動における自己指導能力の形成について検討している¹⁶⁾¹⁷⁾。

上に示した体育学分野と教育学分野における先行研究では、中学校運動部活動を通じたライフスキル獲得、自己指導能力の形成について検討されている。しかしながら、中学校運動部活動における生徒指導の意義について論じた学術的な研究は少なく、生徒に育む社会的な資質・能力に関する調査研究及びエビデンスが不十分であったと思われる。

そこで、本研究では、大学生を対象とした想起法による中学校部活動体験についての質問紙調査を実施する。そして、新たに部活動尺度を作成し、中学校運動部活動を通して形成される社会的な資質・能力について大学生がどのように捉えているのかについて、公立中学校運動部活動経験者に焦点を当てた探索的な検討を行う。このことを通じて中学校運動部活動における生徒指導の意義を明らかにしていく。

2. 方 法

(1) 質問紙調査用紙の作成

大学生を対象として実施した自由記述式のアンケート調査で得た知見¹⁸⁾と、新井(2004)、仁木(2010)他の先行研究を参考に質問紙調査用紙を作成した¹⁹⁾²⁰⁾。

(2) 調査対象者と調査対象校

近畿地方・関東地方の大学・短期大学の学生2318名(教職課程科目受講者2193名,社会科学系科目受講者125名)を対象に質問紙調査を実施した。そのうち,記入漏れのなかった1973名を分析対象とした(表1)。

(3) 調査時期と調査手続き

質問紙調査は,4件法の自己評価であり2018年6月下旬以降7月下旬を目途に実施を依頼した。なお,質問紙調査の実施に当たっては,「桃山学院大学研究倫理委員会」に「人を対象とする研究倫理審査申請」を行い,その委員会から承認を得ている。

3. 結 果

集約した質問紙調査用紙データの得点化を行った。得点化では各項目に「とても当てはまる」(4点),「まああてはまる」(3点),「あまりあてはまらない」(2点),「まったくあてはまらない」(1点)を与え,平均値と標準偏差等,基礎統計量を算出した(表2)。

(1) 因子分析結果

部活動をとおして育成される資質・能力を明らかにするために,23項目

中学校運動部活動における生徒指導の意義に関する検討

表1 調査協力校及び人数

	地方	調査協力校	出身中学設置区分			合計	%
			公立	国・私立	不明		
1	東北地方	A大学	48	7		55	2.8%
2		B大学	115	11		126	
3		C大学	35	10		45	
4	関東地方	D大学	91	22		113	17.8%
5		E大学	15	2		17	
6		F大学	47	4		51	
7		G大学	13	0		13	
8		H大学	49	11		60	
9		I大学	19	3		22	
10		J大学	106	18	2	126	
11		K大学	285	83		368	
12		L大学	20	4		24	
13		M大学	33	5		38	
14		N大学	157	23	1	181	
15		O大学	49	7		56	
16	近畿地方	P大学	15	1		16	79.4%
17		Q大学	26	7		33	
18		R大学	48	2		50	
19		S大学	176	26		202	
20		T大学	106	13	1	120	
21		U大学	64	18		82	
22		V大学	20	5		25	
23		W短大	20	2		22	
24		X短大	27	0		27	
25		Y短大	97	4		101	
合計			1681	288	4	1973	100.0%

について因子分析を行った。分析では、SPSS を使用し最尤法により因子を抽出した。固有値の変化は、11.56, 1.46, 1.38, 1.01, ……というものであり、4 因子構造が妥当であると考え、Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった5項目を分析から除外し、再度、最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転の最終的な因子パターンと因子間相関を表3に示す。回転前の4因子で19

表2 質問項目の平均値と標準偏差

項目	N	M	SD
v1. 先輩後輩の縦の人間関係を築く	1846	3.55	0.67
v2. 自分の意見を相手にわかりやすく伝える	1846	3.10	0.78
v3. 相手の意見を丁寧に聴く	1846	3.25	0.74
v4. 考え方の違いや立場の違いを理解する	1846	3.36	0.70
v5. ものごとにねばり強く取り組む	1846	3.54	0.65
v6. 友達をたくさんつくる	1846	3.40	0.75
v7. ルール・マナーを守る	1846	3.60	0.62
v8. 約束を守ることができる	1846	3.50	0.68
v9. 競技力や技能の向上	1846	3.58	0.65
v10. 大会やコンクールで実力を発揮する	1846	3.40	0.80
v11. 失敗してもすぐにあきらめない	1846	3.48	0.68
v12. 人から頼まれたことは最後までやり遂げる	1846	3.36	0.71
v13. 目上の人や先輩に敬語をつかう	1846	3.65	0.61
v14. 態度や行動がお手本となる先輩を見て学ぶ	1846	3.46	0.74
v15. 後輩のお手本となるよう態度や行動に意識をする	1846	3.42	0.74
v16. 後輩にアドバイスをする	1846	3.38	0.76
v17. 同級生にアドバイスをする	1846	3.21	0.82
v18. 先輩に悩みを相談する	1846	3.04	0.93
v19. 同級生に悩みを相談する	1846	3.22	0.83
v20. 自分のよいところを見つける	1846	3.24	0.77
v21. 仲間から自分のことを認められる	1846	3.34	0.70
v22. 仲間から信頼される	1846	3.37	0.70
v23. 人の役に立つことをする	1846	3.33	0.73

項目の全分散を説明する割合は、60.29%であった。

第1因子は7項目で構成されており、「ルール・マナーを守る」「ものごとくにねばり強く取り組む」「目上の人や先輩に敬語をつかう」「失敗してもすぐにあきらめない」など、部活動における自己指導能力に関わる内容の項目が高い負荷を示している。そこで、「自己指導」因子と命名した。

第2因子は4項目で構成されており、「仲間から自分のことを認められる」「仲間から信頼される」「自分のよいところを見つける」といった、部活動における他者との関係を通じた自己有用感の形成に関わる内容の項目が高い負荷を示している。そこで、「自己有用」因子と命名した。

中学校運動部活動における生徒指導の意義に関する検討

表3 部活動尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン) n=1,846

	F1	F2	F3	F4	α 係数	
v. 7 ルール・マナーを守る	.79	-.05	-.14	.21		
v. 5 ものごとにねばり強く取り組む	.67	.12	-.02	.01		
v.13 目上の人や先輩に敬語をつかう	.66	-.12	.20	.02		
v.11 失敗してもすぐにあきらめない	.60	.17	.06	.00	0.87	
v. 9 競技力や技能の向上	.60	.05	.24	-.21		
v.10 大会やコンクールで実力を発揮する	.48	.12	.26	-.22		
v. 6 友達をたくさんつくる	.39	.27	-.02	.08		
v.21 仲間から自分のことを認められる	.00	.98	.00	-.09		
v.22 仲間から信頼される	.06	.96	-.02	-.10	0.90	
v.20 自分のよいところを見つける	.03	.59	.12	.10		
v.23 人の役に立つことをする	.13	.51	.01	.23		
v.16 後輩にアドバイスをする	.13	-.01	.77	-.01		
v.15 後輩のお手本となるよう態度や行動に意識をする	.26	-.06	.69	-.03		
v.14 態度や行動がお手本となる先輩を見て学ぶ	.29	-.07	.61	-.01	0.88	
v.18 先輩に悩みを相談する	-.15	.18	.59	.14		
v.17 同級生にアドバイスをする	-.10	.18	.57	.21		
v. 3 相手の意見を丁寧に聴く	.00	-.08	.00	.91		
v. 2 自分の意見を相手にわかりやすく伝える	-.10	.00	.11	.82	0.85	
v. 4 考え方の違いや立場の違いを理解する	.16	-.01	.05	.59		
	因子相関	F1	F2	F3	F4	
	F1	—	.65	.67	.63	
	F2		—	.69	.64	
	F3			—	.56	
	F4				—	

第3因子は5項目で構成されている。「後輩にアドバイスをする」「後輩のお手本となるよう態度や行動に意識をする」「先輩に悩みを相談する」など、部活動における先輩後輩関係に関する項目が高い負荷を示している。そこで、「先輩後輩関係」因子と命名した。

第4因子は、3項目で構成されており、「相手の意見を丁寧に聴く」「自分の意見を相手にわかりやすく伝える」といった、部活動におけるコミュニケーションに関わる内容の項目が高い負荷を示している。そこで、「コミュニケーション」因子と命名した。

(2) 下位尺度間の関連と信頼性の検討

部活動尺度の4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「自己指導」下位尺度得点 ($M=24.65$, $SD=3.59$), 「自己有用」下位尺度得点 ($M=13.28$, $SD=2.55$), 「先輩後輩関係」下位尺度得点 ($M=16.50$, $SD=3.28$), 「コミュニケーション」下位尺度得点 ($M=9.70$, $SD=1.94$), とした。内的整合性を検討するために, Cronbach の α 係数を算出したところ, 「自己指導」で $\alpha=.87$, 「自己有用」で $\alpha=.90$, 「先輩後輩関係」で $\alpha=.88$, 「コミュニケーション」で $\alpha=.85$ と十分な値が得られた。部活動尺度の下位尺度間相関を表4に示す。4つの下位尺度はお互いに有意な正の相関を示した。この18項目を部活動尺度として採用することとした。

表4 部活動尺度の下位尺度間相関と信頼性係数

	自己指導	自己有用	先輩後輩関係	コミュニケーション	M	SD	α
自己指導	—	.69 **	.72 **	.58 **	24.65	3.59	0.87
自己有用		—	.71 **	.60 **	13.28	2.55	0.90
先輩後輩関係			—	.59 **	16.50	3.28	0.88
コミュニケーション				—	9.70	1.94	0.85

** $p < .01$

(3) 部活動尺度の下位尺度における得点差の分析

本項では, 部活動尺度の下位尺度における得点差について探索的に検討するため, 次の①から④について分析する。①公立中学校における運動部経験者・文化部経験者・部活動未加入者の差の分析。②公立中学校運動部経験者の都市部・都市部周辺地域・農山漁村地域差の分析。③公立中学校運動部経験者の学力の差と部活動における活躍の場の有無・充実感の有無による差の分析。④公立中学校運動部経験者における顧問教師の技術指導力の差と顧問教師の熱意の有無・顧問教師の活動場所への立ち会いの有無の差の分析。

中学校運動部活動における生徒指導の意義に関する検討

① 部活動尺度の下位尺度における公立中学校の運動部経験者・文化部経験者・部活動未加入者の差の分析

部活動尺度の下位尺度における得点について、公立中学校における運動部経験者（ $n=1234$ ）・文化部経験者（ $n=333$ ）・部活動未加入者（ $n=114$ ）（部活動区分）の差について分散分析を行った結果、公立中学校における自己指導因子得点で有意な差が見られた。多重比較（Tukey法）によると、運動部経験者の平均が文化部経験者と部活動未加入者の平均よりも有意に大きかった（ $F_{[2, 1678]}=6.82, p<.001$ ）。（表5）

② 部活動尺度の下位尺度における公立中学校運動部経験者の都市部・都市部周辺地域・農山漁村地域の差分析

部活動尺度の下位尺度における得点について、公立中学校運動部における都市部（ $n=289$ ）・都市部周辺地域（ $n=668$ ）・農山漁村地域（ $n=266$ ）（部活動地域別）の差について分散分析を行った結果、コミュニケーション因子得点で有意な差が見られた。多重比較（Tukey法）によると、都市部の平均が都市部周辺地域の平均よりも有意に大きかった（ $F_{[2, 1220]}=5.56, p<.01$ ）。（表5）

表5 分散分析表（公立中学校部活動 被験者間効果）

	部活動区分			運動部地域別		
	df	F 値	<i>p</i>	df	F 値	<i>p</i>
自己指導	2	6.82	0.001 **	2	.74	.48
自己有用	2	1.55	.21	2	.37	.69
先輩後輩関係	2	.17	.84	2	1.11	.33
コミュニケーション	2	.54	.58	2	5.56	0.00 **

** $p<.01$

③ 公立中学校運動部経験者の学力の差と部活動における活躍の場の有無・充実感の有無による差の分析

質問紙調査の設問「学校の勉強が得意である」の得点で3点～4点を

「学力高群」, 1点~2点を「学力低群」とした。そして, 質問紙調査の設問「部活動で活躍できる場があった」の得点で3点~4点を「活躍の場あり群」, 1点~2点を「活躍の場なし群」とした。次に, 質問紙調査の設問「部活動は充実していた」の得点で3点~4点を「充実あり群」, 1点~2点を「充実なし群」とした。上に示した分類をもとに学力高群と低群における活躍の場の有無, 部活動における充実感の有無による差についてt検定を行った。その結果, 学力高群では, 活躍の場あり群の全ての因子得点について, 充実なし群よりも充実あり群のほうが1%水準で有意に高い得点を示していた。また, 学力高群における活躍の場なし群では, 自己指導因子得点が1%水準で, 自己有用因子得点と先輩後輩関係因子得点が5%水準で充実なし群よりも充実あり群のほうが有意で高い得点を示していた(表6)。

表6 公立中学校運動部活動・学力高群における部活動指導尺度の差(t検定)の結果

因子名	充実なし			充実あり			t値	df	p	
	N	M	SD	N	M	SD				
活躍の場あり	自己指導	29	3.37	0.56	567	3.64	0.41	-3.34	594	.00**
	自己有用	29	3.17	0.68	567	3.47	0.54	-2.88	594	.00**
	先輩後輩関係	29	3.12	0.72	567	3.415	0.58	-2.62	594	.01**
	コミュニケーション	29	2.98	0.75	567	3.288	0.62	-2.60	594	.01**
活躍の場なし	自己指導	29	3.13	0.64	40	3.48	0.43	-2.76	67	.01**
	自己有用	29	2.79	0.94	40	3.21	0.58	-2.26	67	.03*
	先輩後輩関係	29	2.90	0.69	40	3.23	0.60	-2.06	67	.04*
	コミュニケーション	29	2.91	0.81	40	2.98	0.55	-0.41	67	.68 ns

* $p < .05$ ** $p < .01$

次に, 学力低群では, 活躍の場あり群の全ての因子得点について, 充実なし群よりも充実あり群のほうが1%水準で有意に高い得点を示していた。また, 学力低群における活躍の場なし群では, 自己指導因子得点が5%水準で充実なし群よりも充実あり群のほうが有意で高い得点を示していた。そして, 自己有用因子得点が10%水準で充実なし群よりも充実あり群のほ

中学校運動部活動における生徒指導の意義に関する検討

うが有意傾向を示していた（表7）。

表7 公立中学校運動部活動・学力低群における部活動指導尺度の差（t検定）の結果

因子名	充実なし			充実あり			t 値	df	p	
	N	M	SD	N	M	SD				
活躍の場あり	自己指導	39	3.24	0.66	430	3.62	0.41	-5.19	467	.00**
	自己有用	39	2.95	0.77	430	3.34	0.56	-3.99	467	.00**
	先輩後輩関係	39	2.82	0.80	430	3.32	0.61	-4.88	467	.00**
	コミュニケーション	39	3.06	0.75	430	3.31	0.57	-2.52	467	.01**
活躍の場なし	自己指導	52	2.96	0.75	48	3.26	0.57	-2.25	98	.03*
	自己有用	52	2.73	0.75	48	2.98	0.72	-1.72	98	.09†
	先輩後輩関係	52	2.76	0.88	48	3.00	0.72	-1.50	98	.14 ns
	コミュニケーション	52	2.80	0.69	48	2.94	0.61	-1.09	98	.28 ns

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

④ 公立中学校運動部経験者における顧問教師の技術指導力の差と顧問教師の熱意の有無・顧問教師の活動場所への立ち会いの有無の差の分析

質問紙調査の設問「顧問は、技術や能力を高める指導をしてくれた」の得点で、3点～4点を「顧問技術指導あり群」、1点～2点を「顧問技術指導なし群」とした。そして、質問紙調査の設問「顧問は、部活動で熱心に指導してくれた」の得点で、3点～4点を「顧問熱意あり群」、1点～2点を「顧問熱意なし群」とした。次に、質問紙調査の設問「顧問は、活動中は常に活動場所にいた」の得点で3点～4点を「顧問在群」、1点～2点を「顧問不在群」とした。上に示した分類をもとに顧問技術指導あり群と顧問技術指導なし群における顧問教師の指導熱意の有無、顧問教師の活動場所への立ち会いの有無による差についてt検定を行った。

その結果、顧問技術指導あり群では、顧問熱意あり群の全ての因子得点について、顧問不在群よりも顧問在群のほうが1%水準で有意に高い得点を示していた（自己指導： $t = -4.41$, $df = 955$, $p < .01$ 自己有用： $t = -4.03$, $df = 955$, $p < .01$ 先輩後輩関係： $t = -4.32$, $df = 955$, $p < .01$ コミュニケーション： $t = -4.72$, $df = 955$, $p < .01$ ）また、顧問技術指導あ

り群における顧問熱意なし群では、全ての因子得点について有意な差は見られなかった（表8）。

表8 公立中学校運動部活動顧問技術指導あり群における差（t検定）の検討

因子名	顧問在			顧問不在			t値	df	p	
	N	M	SD	N	M	SD				
顧問熱意あり	自己指導	837	3.63	0.43	121	3.44	0.53	-4.41	956	.00 **
	自己有用	837	3.41	0.58	121	3.18	0.66	-4.03	956	.00 **
	先輩後輩関係	837	3.39	0.59	121	3.14	0.69	-4.32	956	.00 **
	コミュニケーション	837	3.32	0.59	121	3.05	0.64	-4.72	956	.00 **
顧問熱意なし	自己指導	9	3.51	0.40	8	3.36	0.45	-0.74	15	.47 ns
	自己有用	9	3.19	0.45	8	3.25	0.46	0.25	15	.80 ns
	先輩後輩関係	9	3.31	0.45	8	2.75	0.82	-1.78	15	.10 ns
	コミュニケーション	9	3.15	0.65	8	2.96	0.52	-0.66	15	.52 ns

** $p < .01$

次に、顧問指導技術なし群では、顧問熱意あり群のコミュニケーション因子得点について、顧問不在群よりも顧問在群のほうが5%水準で有意に高い得点を示していた ($t = -2.11$, $df = 114$, $p < .05$)。また、顧問技術指導なし群における顧問熱意なし群では、先輩後輩関係因子得点が5%水準で顧問不在群よりも顧問在群のほうが有意に高い得点を示していた ($t = -2.08$, $df = 141$, $p < .05$)。そして、自己有用因子得点が10%水準で顧問不在群よりも顧問在群のほうが有意傾向を示していた ($t = -1.20$, $df = 141$, $p < .10$)（表9）。

4. 考察と今後の課題

本項では、部活動尺度の下位尺度における得点差について探索的に検討してきたことについて考察を述べる。

まず、公立中学校における運動部経験者・文化部経験者・部活動未加入者の差を見たところ、文化部経験者・部活動未加入者よりも運動部経験者に自己指導因子得点で有意な差が見られた。これは、運動部経験者が、運

中学校運動部活動における生徒指導の意義に関する検討

表9 公立中学校運動部活動顧問技術指導なし群における差 (t 検定) の検討

因子名	顧問在			顧問不在			t 値	df	p	
	N	M	SD	N	M	SD				
顧問熱意あり	自己指導	62	3.39	0.64	54	3.42	0.50	0.29	114	.77 ns
	自己有用	62	3.22	0.78	54	3.07	0.69	-1.07	114	.29 ns
	先輩後輩関係	62	3.08	0.78	54	3.16	0.68	0.57	114	.57 ns
	コミュニケーション	62	3.11	0.76	54	2.82	0.72	-2.11	114	.04 *
顧問熱意なし	自己指導	27	3.45	0.49	116	3.30	0.62	-1.20	141	.23 ns
	自己有用	27	3.31	0.59	116	3.06	0.69	-1.70	141	.09 †
	先輩後輩関係	27	3.34	0.51	116	3.01	0.80	-2.08	141	.04 *
	コミュニケーション	27	3.16	0.59	116	3.02	0.68	-1.01	141	.31 ns

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

動部では練習や試合を通じた集団活動の機会が多く、競技力や体力の向上を図るために練習にねばり強く取り組むことや試合で能力を発揮することにより、自己指導能力の向上が図られたと考えている可能性が示唆される。

次に、公立中学校運動部における地域別の違いをみたところ、都市部周辺地域よりも都市部にコミュニケーション得点で有意な差が見られた。中村（2012）は、現在の子どもが、模倣の機会や多様な人間関係を結ぶ機会が著しく少なくなっていることを指摘し、生徒指導上の諸問題が山積する日本の学校では、教育の重点を、3R's、つまり、読み・書き・算に加えて第4のR（人間関係 Relation）にも置かなければならないことを述べている²¹⁾。

現代の日本社会では核家族化・少子化が進行し、生徒は、親や教師以外の大人や異年齢の仲間と交流する機会が減少している。特に、都市部においてこのような傾向が進んでいることから、運動部活動が、コミュニケーション力形成の場として機能していると捉えているのではないだろうか。

そして、公立中学校運動部経験者の学力の差と部活動における活躍の場の有無・充実感の有無による差の分析では、学力高群と学力低群のそれぞれにおいて、運動部活動において活躍の場があり、充実感を持っているほうが全ての因子得点において有意な差として示された。他方、学力低群に

において、活躍の場なし群でも、充実感を持って運動部活動に取り組んでいた場合は、自己指導因子得点で有意な差が、自己有用因子得点において有意傾向が示された。

運動部活動では、生徒の体力や技術力等に個人差があるため、全ての生徒に対して試合や競技会等に出場し、自らの能力を十分に発揮できる場が確保されているわけではない。また、生徒の中には、教科の学習に意欲的に取り組めない者や苦手意識のある者もいる。

そのため、運動部活動では、自らの興味関心に基づき生涯にわたってスポーツに慣れ親しむ態度や意欲を涵養することや、個に応じた体力や技術力の向上を図ることはもちろんのこと、「ひとりひとりの生徒の人格の価値を尊重し、個性の伸長を図りながら、同時に社会的資質や行動を高めようとする」ことが求められるのである²²⁾。このことは生徒指導の意義であり、運動部活動が生徒指導の重要な機能として作用する所以である。

また、公立中学校運動部経験者における顧問教師の技術指導力の差と顧問教師の熱意の有無・顧問教師の活動場所への立ち合いの有無の差の分析では、調査対象者は、技術指導力があり、熱意をもって指導し、活動場所に常に立ち会っている顧問教師に指導を受けたと捉えているほど因子得点において有意な差が示された。

他方、技術指導力や熱意は十分とは言えないが、活動場所に常に立ち会っている顧問教師による指導を受けたと捉えている場合も、先輩後輩関係因子得点で有意な差が、自己有用因子得点において有意傾向が示された。これは、顧問教師の技術指導力や熱意に課題があったとしても、＜先輩－後輩＞からなる縦の人間関係により日常的に集団活動が行われることで、先輩が後輩に技術指導を行うことや後輩が先輩を手本として自らの成長を目指すことなど生徒主体の活動が行われている可能性が示唆される。

近年の中学校教師は多忙である²³⁾。このことに関連して、文部科学省は、

中学校運動部活動における生徒指導の意義に関する検討

「チームとしての学校」や「働き方改革」の理念のもと、持続可能な運動部活動のための改革を進めている。上述した研究結果は、これからの部活動の在り方を検討するための知見を提供することができたと考えている。

ところで、生徒指導は、教育課程内外において機能として作用してきた。それゆえ、生徒指導は、教育課程の領域の枠内で指導と評価が行われる各教科や道徳等の教育活動とは違って、生徒の社会的な資質・能力の向上にどのように影響しているのかについて検討することが困難であった。

本研究では、運動部活動を通して形成される資質・能力についての尺度を作成し、中学校運動部活動における生徒指導の機能を探索的に検討し明らかにしてきた。他方、調査対象者の多くが中学生や高校生として学校生活を送っていた時期は、運動部活動の運営体制や指導内容に変革が求められていた時期である。2012年に大阪市の高等学校運動部において、顧問教師の体罰に起因する生徒の自殺事案発生し、顧問教師や指導者による体罰が社会問題となった。2014年には、OECD（経済協力開発機構）による国際指導環境調査（TALIS, 2013）の結果が公表され、教師の長時間労働が問題視された。本研究を通して、調査対象者が、上に示したような変革期にある中学校運動部活動の内実をどのように捉えていたのかが明らかとなり、これからの中学校運動部活動の在り方を検討するうえで参考となる示唆を得られたと考える。

しかしながら、本研究では、主な調査対象者が、教職課程科目を受講する大学・短期大学生であったため、学校生活や運動部活動に対して望ましい回答をしようとする一定のバイアスがかかった可能性が考えられる。また、顧問教師の指導力や部活動指導に対する熱意等は、調査対象者の主観的な判断によるものである。これからの中学校運動部活動の在り方を提言していくためには、中学校運動部活動における生徒指導の意義について多様な視点から検討を加えることが必要である。このことが今後の課題であ

る。

注

- 1) 教育再生実行会議「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上（第十次提言）」2017年
- 2) 文部科学省「学校教育法施行規則の一部を改正する省令（平成29年文部科学省令第4号）の施行について（通知）」2017年
- 3) スポーツ庁「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」2018年
- 4) 文部科学省 中央教育審議会「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」文部科学省2015, pp. 3-8
- 5) 川口厚（2019）「過渡期にある部活動－教育的意義の再考－」『月刊生徒指導』第49巻第3号 pp. 68-70
- 6) 桂和仁・中込四郎（1990）「運動部活動における適応感を規定する要因」『体育学研究第』35巻第2号
- 7) 石田靖彦・亀山恵介（2005）「中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響－部活動集団の特徴と部活動への意欲に注目して－」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第9号
- 8) 角谷詩織（2005）「部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか－学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから－」『発達心理学研究』第16巻第1号
- 9) 岡田有司（2009）「部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響－部活動のタイプ・積極性に注目して－」『教育心理学研究』第57巻第4号
- 10) 佐川馨・羽澤知子（2009）「中学校吹奏楽部員の部活動「満足感」「有用感」に影響する要因－部活動に所属する中学生への質問紙調査の結果から－」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第31号
- 11) 日野克博（2010）「中学校部活動における生徒のライフスキル獲得と生徒からみた指導者のライフスキル指導との関係」『愛媛大学教育学部保健体育紀要』第7号
- 12) 青木久美子・杉森弘幸・下川真良・熊谷佳代（2011）「中学校時代の運動

中学校運動部活動における生徒指導の意義に関する検討

- 部活動体験が及ぼす人間形成について－大学生の回顧調査から－』『岐阜大学教育学部研究報告（自然科学）』第35巻
- 13) 東野充成（2003）「部活動と中学生の対人関係－教師・友人関係を中心に－」『日本特別活動学会紀要』第11号
 - 14) 中川靖彦・新井肇（2006）「『生きる力』の育成と中学校における運動部活動の教育的価値の研究」『生徒指導研究』第18号
 - 15) 長谷川祐介（2011）「大学生活に対する志向性に及ぼす中学高校部活動の影響－教科外活動の長期的効果に関する分析可能性－」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第33巻第1号
 - 16) 桑野友裕・小原達朗・笹山龍太郎（2014）「生徒指導の内容を踏まえた運動部活動指導の研究－自己指導能力を育む運動部活動指導－」『教育実践総合センター紀要』
 - 17) 川口厚（2015）「生徒の自己指導能力を高める運動部活動の指導方法に関する考察－A中学校における指導実践の検証から－」佛教大学大学院修士論文
 - 18) 川口厚（2018）「生徒指導の実践の場としての部活動の教育的意義－社会的なりテラシー育成の視点からの検討－」『桃山学院大学経済経営論集』第59巻第4号
 - 19) 新井洋輔（2005）「サークル集団における先輩後輩間行動の構造」『筑波大学大学院博士論文』, 付表 pp. 2-72
 - 20) 仁木幸男（2011）「中学校の部活動の教育的効果に関する研究：歴史的考察と調査研究」, 早稲田大学大学院博士論文, pp. 360-367
 - 21) 中村豊（2012）「積極的生徒指導のための授業カリキュラム開発についての研究－子どもの基礎的人間力養成の授業実践とその有効性の検証－」『関西学院大学博士学位論文』, pp. 44-48
 - 22) 文部省（1965）『生徒指導の手引き』大蔵省印刷局 p. 2
 - 23) 2016（平成28）年に実施された、ベネッセ教育総合研究所の調査によると、中学校教師は、小学校と高等学校の教師に比べて授業日の勤務時間が長く、土日に出勤する割合が高いことが示されている。

<出典>

ベネッセ教育総合研究所（2016）「第6回学習指導基本調査 DATA BOOK

人間文化研究 第12号

(小学校・中学校版)」 pp. 26-29 <https://berd.benesse.jp/up_images/research/Sido_KOKO_07.pdf> (2018年11月30日最終アクセス)

An Examination of the Significance of Guidance and Counseling in Extracurricular Sport Activities of Junior High Schools

—Based on results of a questionnaire survey
by recall aimed at university students—

KAWAGUCHI Atsushi

abstract

The purpose of this study is to clarify the competence formed through extracurricular sport activities at junior high school level by focusing on the significance of student guidance and counseling of extracurricular activities in public junior high schools. Therefore, I conducted a questionnaire survey on the experience of junior high school extracurricular activities using the recall method for 2318 students attending universities and junior colleges. In addition, I made an extracurricular activity scale through this questionnaire survey and explored how university students perceive the social competence formed through public junior high school extracurricular sport activities. As a result, it was suggested that junior high school extracurricular sport activities had a significant impact on the formation of students' social competence.